

# ピープルの地平へ

## 世界の市場化に抗して

1

文化



激しさを増していった。しかし、参加者のなかから、「デモだけでグローバル化を止めることはできない。座って議論しよう」という意見がでてきた。



「きたざわ・よつこ」国際問題評論家。1933年、東京生まれ。アジア・アフリカ人連帯機構の国際事務局（エジプト）に勤務した後、非政府組織（NGO）の活動に従事。元日本平和学会会長。著書に「利潤か人間か」「開発は人びとの手で」など。

世界社会フォーラムの会場では「もう一つの世界」を象徴する手作りの大きな「地球」が参加者の手で持ち上げられた。2005年1月、ブラジル・ポルトアレグレ。©世界社会フォーラム事務局

（今回は5月1日に掲載します）

## 広がるオルタナティブな実践

北沢 洋子



「きたざわ・よつこ」国際問題評論家。1933年、東京生まれ。アジア・アフリカ人連帯機構の国際事務局（エジプト）に勤務した後、非政府組織（NGO）の活動に従事。元日本平和学会会長。著書に「利潤か人間か」「開発は人びとの手で」など。

「もう一つの世界は可能だ」。

これは、二〇〇一年一月末、ブラジル南端の都市ポルトアレグレで開催された「世界社会フォーラム」の参加者たちの共通の言葉だった。

8などサミット・レベルの会議が開かれるたびに、世界中から一万人を超える人びとが集まり、大規模な反グローバル化デモが繰り広げられていた。

このデモは、回を重ねるごとに規模が大きくなり、

毎年一月末、先進国の大企業の重役や政治家が集まる世界戦略を議論する「世界経済フォーラム」がスイスのダボスで開催されている。ポルトアレグレの「世界社会フォーラム」はそれに対抗する「怒れる市民」の集会として生まれた。

そして、昨年一月、同じポルトアレグレで開催された第五回フォーラムの参加者は十二万人にのぼった。

フランスのシラク大統領や英国のブレア首相は、昨年のダボス・フォーラムで「アフリカの貧困根絶を最

優先課題にしよう」とスビを推進しているIMF、世界銀、WTOなど、顔のない国際機関について議論が交わされた。とくに、南米の農民たちから激しい怒りの声があがった。彼らは「政府はIMFや世銀の言いなりになって民営化を進め、貧困者を見殺しにしている」

南の生産者と北の消費者が手を結んで、自由貿易ではなく公正な貿易を目指している動きもある。そして、マスメディアに対抗して、人びとに真実を伝えようとする独立メディアの試みもある。

# 人間的な経済活動 求め

現在進行しているグローバル化は、単に「グローバル化」を叫ぶだけに止まらなかった。集まった人びとは、すでにそれぞれが地域で、草の根で「もう一つの世界」をつくるために活動しており、それらの経験を交流する場となったのである。

今日それは、「市場経済」「企業経済」に対抗する「連帯経済」あるいは「社会経済」の枠組みを形づくりにながら世界に広がり、すでにブラジルやアルゼンチンなどでは、人びとの活動が政府を動かすようになってきている。グローバル化の流れ自体を変えるには至っていないが、人びとのオルタナティブな（もう一つの）実践のなかから、市場経済の「暴走」を押しとどめる力が生まれ、いま確実に根付きつつあるのだと思う。

（今回は5月1日に掲載します）